

の魁偉なる鼻が、こゝに一種の象徴として、後世に傳はつたものではなからうか、誰れかが義太夫の鼻にあやかりたいものと、これを傳へたのだと見ることは出来ないだらうか。

三都の淨瑠璃王

淨雲、播磨、加賀

日夜の念願を達して、たうとう一人前の太夫となり、道頓堀へ現はれた理太夫は、その藝が非凡であつたばかりでなく、頭の發達した男だつたと見えて、瞬く間に師匠や大師匠の所謂井上流淨瑠璃なるものゝ蘊奥をすつかり呑み込んでしまつた。それと同時に、なんだかまだこの上にも廣い藝の天地があるやうな氣がしてならなかつた。もともと負けじ魂と向上心に燃え上つてゐる若い理太夫、こんなことでは我慢が出来なかつた。何處までも奥の奥まで究めてかゝらねば承知が出来ないといふ氣がし出して來たのである。彼は一旦道頓堀の地を離れようと決心して、師匠の許可を得て、一座を引連れて京都へ出向いた。といふのは、京都には紀州の和

歌山から乗出して、京都の淨瑠璃として深い根柢を据えてゐる宇治嘉太夫（後に加賀掾）の一座がある。それ等の他流と對抗して見たいからでもあつた。天和初年、四條河原の小屋で『日本王代記』や『松浦五郎』などの井上流淨瑠璃を上演した理太夫は、その意氣込みの熾んであつたのにも似ず、みごと失敗に失敗を重ねてさんさんの體だつた。暫らく休場をつゞけてゐた理太夫は蹶然として一座を解散し、飄然敵方であるべき筈の宇治嘉太夫の一座に投じた。いふまでもなく井上流の深奥を極めて嫌らずとした理太夫は、更に宇治流の秘奥を探ぐらんとするの精神からであつた。

井上流といひ、宇治流といふ、この京阪の二大家が、いつたいどこから流れて來てゐるかといふと、その源に薩摩淨雲といふたいへんな大物がある。理太夫の今後の功績を語る上に於て、是非とも知らねばならぬ淨瑠璃の源流であるのだから、この淨雲を始め二分流である、井上播磨と宇治加賀の状態をくはしく説いて置くことにする。元來創始時代の淨瑠璃といふものは混沌散漫として、殆んど捉へどころのないやうな形式のものであつたのを、兎も角も『操り淨瑠璃芝居』としての形を備へるまでに漕ぎつけたのは淨雲を始め播磨、加賀の功績であつて、寛永年間から寛文に亘つて、この大事業が爲し遂げられたのである。

先づ順序として薩摩淨雲から始める。

泉州堺の人で祖父の淨兄は水無瀬流の琵琶の達人、その子の淨慶は薩摩掾を受領して西の宮の傀儡師を語らつて人形を操らせ、豊太閤の御覽に入れた名譽の人。淨雲は即ちこの淨慶の子で、生れは文祿四年、通稱が源太郎直嗣、藝名が虎屋治郎右衛門又は小平太、はじめ澤住檢校の門に入つて薩摩太夫と名乗り後年剃髮して淨雲と改めた。戰國時代の氣風を享けて非常に剛健な性格の人で、どうも京阪のやうな柔らかな氣風が氣に入らなかつたものと見えて、寛水の初年江戸に下つた。

江戸へ出た淨雲は中橋廣小路に芝居を立て、人形操り淨瑠璃を興行しはじめた。この時までかうした興行物には一定の小屋といふものが無かつたのを、此時始めてさうした常設興行場といふものが出来たのである。この興行中たまたま薩摩の島津侯の目に止まり、屢々その館に召されて御覽に入れることになつたが、島津侯は淨雲の藝を非常に感嘆されて、京の人形師に命じてこれまで使つてゐた土人形を止めて之れを使へと悉く木の人形と取り替へられた。通り四丁目に住む鶴屋某といふのがその人形の御用を承つたのだが、これが木の人形の始まりだとあゝる。なほ又此座で使用する紙幕が美しい絹の幕に取り替へられたのも島津侯の賜物である。そ

れは或日「夜討會我紋盡しの段」を語つてゐる時、島津侯の見物があつた。「十文字は島津の紋」といふ所を、早速の機智で「丸に十文字は御家の御紋」と語り替へたので非常に御意に適つて、すぐ館に掛けられてある絹の幕を外して下げ渡されたといふことになつてゐる。かういつた調子で従来まで簡單素朴であつたところの人形淨瑠璃が次第に華美になつて來て、鼠木戸の上に拜領の絹の幕が張られるやら、だいぶ豪華の風に傾いて來た。そんな譯で寛文十二年俄然興行禁止を命ぜられるやうなことになる。淨雲は獄に投せられたが、これは間もなく免された。併し淨雲の江戸出現は如何に當時の人々を驚かしたか、江戸風の人情に適つた豪快な淨雲の語りぶりは、當時の作者北條宮内の書いた「長生殿」「高館」「八嶋」「大職冠」に淨雲が自ら節附をしてゐる點に於ても、思ひ半ばに過ぎるものがある。又淨雲とても自ら淨瑠璃の作をしたといふことであるが、これは今に傳はつてゐるものがない。創始時代の短篇物に謙らず段物の六段續きを語つたのも淨雲が始まりである。

さて此淨雲門下の四天王に、虎屋丹後掾、同長門掾、同丹波掾、同源太夫がある。丹後と長門は師匠の衣鉢を傳へた人。丹波はその性質が豪氣で激越な感情をもつてゐた人で、後に市川家の荒事の素因を爲す金平淨瑠璃を創始した謂はゞ武斷派の奇傑である。さうして、もう一人

の源太夫は、丹波とは全く相反して優艶閑雅とも云はうか、どうも荒つぽい江戸の空氣には合はない人だつた。本人はむろんそれを自覺して京都へ移ることになり、同門の宮内喜太夫などと結んで、次第にこの優美な王城の地の氣風に合ふやうな淨瑠璃を語つて、だんだん深い根を植ゑつけた。

この源太夫の門人が即ち井上播磨で、宮内の門人が即ち宇治加賀である。

井上播磨は寛永九年、京都上立賣に生れて、通稱を市郎兵衛と云ひ、大内の御簾を調進する工みの家であつた。謠曲に堪能であつたが、やがて源太夫の門に入り、つぶさに研鑽の功を積んだ。やがて一家を爲すに及んで、彼れは周圍をふり返つて見た。京には師匠の源太夫を始め、山本土佐掾、伊勢嶋宮内、虎屋上總掾が割據して勢力を占め、とても播磨が新らしく進出する餘地がない。そこで今は無人の境ともいふべき大阪の地に目をつけ、斷然京都をあとにして大阪へ下つて來た。さうして將來の礎地を爲す可き淨瑠璃の根を下ろしたのである。播磨はどういふ淨瑠璃を語つたかといふと、百餘番の新作物のうち、多くは道行、景事に屬するもので、操り年代記には、その得意中の得意物として、「頼義北國落」の掛物揃、「菅原親王」の歌仙「源氏筑紫合戦」の宮嶋八景、「頼光跡目論」の鹽がま馬の段、又は屏風八景「五天竺」を

數へてゐるが、いふまでもなく作は拙劣で没趣味なものであるけれども一度び播磨の口から傳へられると、その「うれひ」「修羅」の情が剛柔程よく調和して人の心を捉へたものに違ひない。播磨は或時門前を通る江戸萬歳の音調を聞いて自ら大いに發明をした。それは音調に情を寫す、即ち情に應じて自由に節調を使ひ分けるといふ一風を創造した、それが今日傳はるところの所謂「ハリマ地」である。なほ播磨は音律の理論に就ては平生深く考へるところがあつたものと見え、清水理兵衛に示した教訓に、相當含蓄に富んだことを云つてゐる。

淨瑠璃の一體、秋は随分聲花に聳る可し。

是れ人の陰氣を引立てんが爲めなり春はひき締めて柔かならざれば人の心に徹へ難し、云云

播磨が名聲は日に日に高くなつて、故郷京都からも再三出演を懇めて來た。そこで、とりあへず、貞享初年久々京の土を踏むことになつた。四條の芝居で「頼光跡目論」を語つて稀有の好評を博したが、惜しいことには、同二年五月、急病を發して五十四歳を一期として此世を去つた。大阪淨瑠璃の開發者として大恩人たることはいふまでもない。(但しこの歿年については異説がある)

和歌山から出て京の淨瑠璃を開發した宇治加賀も最初はやはり謠曲が堪能であつて、播磨と比べて柔和であり一層濃艶な語り振りをした人である、大宮人の京都の土地にふさはしく、繊細華麗な節廻しを發明して一派を爲した、世に「加賀節」なるもの即ちそれである。

かういふ風に土地の氣風に合ふ創作が出来て來た以上、當然江戸派なるものは影をひそめて、加賀の一人舞臺になつた。

かうして京都の第一人者となつた加賀はその七十七年の全生涯に、可なり夥しい功績をのこしてゐるが、とりわけ、文才があつて松の落葉にある「四條川原涼八景」の端淨瑠璃など、今に聞こえたもので、近松門左衛門と交つては「世繼會我」「當流小栗判官」「主馬判官盛久」「徒然草」「團扇會我」(後に百日會我)などを、又井原松壽軒西鶴には「曆」その他の作物を得てゐる、その他文藝の人々と交通して廣く淨瑠璃節の爲に新作を求めた所謂新人肌であつたらしい。

以上によつて清水理太夫か淨瑠璃道の爲めに、自己一流の藝風を編み出さんと企て、宇治加賀の門に入つた心のほどが窺はれるわけである。宇治流の研究に頭をひそめる一方、流行唄、俗謠、小唄、祭文、説經節、萬歳その他昔曲と名のつくものには、大道藝人の謠ひ物から、物

賣りの呼び聲にまで、微細な注意を拂つて、自らの淨瑠璃を發明することに没頭した。彼は明けても暮れても、たゞ一意その工夫に身心を疲らしたのである。けれども理太夫の思ふ壺にはなかなか嵌つて來ない、苦悶焦慮の月日はずんずんと過ぎて行く。

その頃嘉太夫の芝居に「西行物語」が上場され、理太夫はその二段目、藤澤入道夜盜の段を勤めた。豫て井上流で鍛へた得意の修羅語り、加ふるに無比の豪音、生温い京童へどもを吹き飛ばすの概があり、見物は勿論帥匠の嘉太夫も舌を捲いて驚いてしまった。後世恐る可し、とひそかに嘉太夫をして嘆聲を漏らさしめたといふ。併し理太夫にとつては、かうした當座の人氣や好評ぐらゐは嬉しくもなんともなかつた。彼には相變らず新派創造の煩悶があるばかりである。

ある夜、理太夫は突如として、嘉太夫座を脱出して行方を晦ました。

數日にして、理太夫の姿は西國路へ急ぐ旅人の中から發見した。理太夫には道伴れがあつた。それは興行師の竹屋庄兵衛と三味線彈きの尾崎權右衛門とである。

やがては一派を編み出す理太夫の道伴れになるほどの者、興行師といひ、三味線彈きとは云ひながら、もとより尋常人ではない。他日義太夫旗上げの際、ともに生死をかけて、その成功

を救けた左右の腕である。この三人が旅かけて、どういふことを語り合つたか、想像するに難くはなく、理太夫が熱烈火の如き所信を、二人の胸に強く強く焦きつけたに相違ない。

三人は程なく宮嶋の市を當てに、安藝の巖嶋に着いた。かうして此地に腰を据えて、暫らく興行を續けることにした。芝居は幸ひに好人氣だつたので、假の根據としたのであつた。併し理太夫の目的は決してかういふ興行の上にあるのではなくて、暫らく都塵の煩雜から免れて、將來の飛躍を劃策し、一方靜かに冥想して、新淨瑠璃の發見をハツキリと自分の頭の中から掘み出したい爲めであつた。併しなかなかそれは容易ではない。

理太夫は此上は神の力に縋るよりほかはないと考へた。

芝居が終ねるのをまつて、ひそかに小屋を脱け出し、巖嶋神社の方へと急いだ。春の夜は臙に霞をこめて、さなきだに莊嚴なお社は一層神秘の色を湛へて見せてゐる。彼は社殿の淡い燈籠の灯影をたよりに、長い廻廊を幾曲りして正殿の前、ひたすらに祈願をこめた拜禮を終へたが、彼はなほこゝを立ち去らず、いつまでもいつまでもちつと坐つて何やら冥想に耽つてゐる。

大氣は澄み渡つて人の氣は全くない、遙か海上に聳え立つ大華表の脚を洗ふ潮の光り、床下に満ちくる波の樂音、冥想には打つてつけのいゝ舞臺である。かうして理太夫は毎夜毎夜こゝへ

通つて来て、一流開發に専念した。時には夜を徹したことも屢々であつた。

日本三十六佳選といふ青表紙は、この時の容子を非常に誇張して、風もないのに一時に潮が湧き上り、海上一面に漣が立つて、翼を張る左右の廻廊が浮み上ると見る程に、音楽が空に聞え、花を降りすと共に、天冠を戴き、眞紅の衣を着けた童子が現はれて、理太夫に一軸の巻物を授けた。と記してゐるか、さう都合よく行けば世話はない。併しかうした境地にあつて専念した理太夫の純真な心には、如何なる神をも動かさずには措かなかつたこと、思はれる。

理太夫がかうまで肉をそぎ骨をけつるの思ひをして一流を編み出さんとする、その目的の淨瑠璃とはいつたいどんなものかといふと、すでに曩に述べたやうに、師匠の井上流の長所と加賀の長所を一丸にして、そこに曲節の調和を謀り、更に自己の獨創を其上に盛り上げようとするものなのである。

巖嶋參籠の賜物は遂に理太夫に或る暗示を得さしめた。